



## 村上春樹のボブ・ディラン

今読んでいる村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』（新潮文庫）に、ちょうどボブ・ディランが登場したので引用してみよう。主人公が借りたばかりのレンタカーの操作法を、ボブ・ディランのテープをBGMにして確かめている場面である。

＊

「みなさんがそれくらい注意深く運転して下さると私たちもとてもたすかるんですけど」と彼女は言った。「最近の車のコンピューター式のパネルって、慣れない方には扱いきらいですから」

私は肯いた。慣れないのは私だけではないのだ。「185の平方根の答はどこを押せばわかるんだろう？」と私は訊いてみた。「それは次のニュー・モデルが出るまでは無理みたいですね」と彼女は笑いながら言った。「これ、ボブ・ディランでしょ？」

「そう」と私は言った。ボブ・ディランは『ポジティブ・フォース・ストリート』を唄っていた。二十年経っても良い唄というものは良い唄なのだ。

「ボブ・ディランって少し聴くとすぐにわかるんです」と彼女は言った。

「ハーモニカがスティーヴィー・ワンダーより下手だから？」

彼女は笑った。彼女を笑わせるのはとても楽しかった。私にだってまだ女の子を笑わせることはできるのだ。

「そうじゃなくて声がとくべつなの」と彼女は言った。「まるで小さな子が窓に立って雨降りを見つめているような声なんです」

「良い表現だ」と私は言った。良い表現だった。私はボブ・ディランに関する本を何冊か読んだがそれほど適切な表現に出会ったことは一度もない。簡潔にして要を得ている。私がそういうと彼女は少し顔を赤らめた。

「よくわからないわ。ただそう感じるだけなんです」

「感じたことを自分のことばにするってするのはすごくむずかしいんだよ」と私は言った。「みんないろんなことを感じるけど、それを正確にことばにできる人はあまりいない」

「小説を書くのが夢なんです」と彼女は言った。

「きっと良い小説が書けるよ」と私は言った。

「どうもありがとう」と彼女が言った。

「でも、君みたいに若い女の子がボブ・ディランを聴くなんて珍しいね」

「古い音楽が好きなんです。ボブ・ディラン、ビートルズ、ドアーズ、バーズ、ジミ・ヘンドリックスーそんなの」

「一度君とゆっくり話したいな」と私は言った。

彼女はにっこり笑ってほんの少し首を傾けた。気の利いた女の子というのは三百種類くらいの返事のしかたを知っているのだ。そして、離婚経験のある三十五歳の疲れた男に対しても平等にそれを与えてくれるのだ。私は彼女に礼を言って車を前に進めた。

（下巻 pp244～245）

＊

オシャレな一節である。こういう場面にボブ・ディランは登場するのである。